

2009年3月
第2回国際シンポジウム

甲山治
東南アジア研究所

セッション2 : Geospheric Implication for Biosphere

イニシアチブ2による第2セッション”Geospheric Implication for Biosphere”では、「Learning from the Dynamics of Geosphere and Biosphere」柳澤雅之（地域研究統合情報センター）、「Interrelationship between Hydrological Cycle and Human Activities」甲山治（東南アジア研究所）、「Biodiversity and Ecosystem Function in the Human-made Landscape: Birds Transport Human-Derived Nutrients into Urban Forests」藤田素子（東南アジア研究所）、「Coping with Natural and Socio-economic Uncertainty in Arid Africa」孫暁剛（東南アジア研究所）といった議論が提示された。

柳澤は地球圏と生命圏のダイナミクスに注目し、人と自然の関係性の新たなパラダイムの構築を行っているイニシアチブ2の方向性を説明した。

甲山は中央アジアにおける人間活動によって水循環と生態系が劣化した事例から、人間活動の影響と自然の不可逆性に関する議論を行った。水循環と気候条件は人間活動に影響を与えているが、ときとして人間活動が生態系の破壊や水循環の改変を引き起こす可能性がある。中央アジアの水問題は、ほとんどすべてが人間活動と不十分な水資源管理によるものである。このような問題は科学的、工学的そして政治的なアプローチを用いて、解決されなければならないと述べた。

藤田は都市から排出されたゴミを鳥類が周辺の森に輸送しているというデータから、都市化が物質循環に与える影響を議論した。都市のランドスケープでは森林が多いところに比べて鳥の種数は減少し、バイオマスは増加する。都市の鳥は住宅地で食餌し森林で糞を落とすことによって、住宅地から断片的に残された森林への栄養塩輸送を行っている。都市のランドスケープが高い鳥類バイオマスを維持しており、さらにそのことが断片的に残された森林に多くの栄養塩を供給していると述べた。

孫はケニアにおける不安定な自然と社会の条件下での人々の生活に着目し、彼らの適応戦略だけでなく、彼らの生き方を理解することが重要であることを明らかにした。アフリ

カの乾燥地における人と自然の共生を調べるため、北ケニアのレンディーレ牧畜民を対象としてフィールド調査と長期変動比較を合わせた統合的な研究を行った。その事例研究から、現地の技術・制度が持つ役割を理解し、牧畜民自身の移動性、柔軟性、創造性を促すことが、将来の持続的な発展のために重要かつ不可欠であることを示唆した。